

特別優秀賞

【学校経営・総合】

やればできる！ ～Zoomの活用でピンチをチャンスに～

千葉県君津市立八重原小学校

山村 由美子



1 はじめに ～やればできる～

2020年度は異例のスタートだった。始業式・入学式は規模を縮小して実施できたが、新型コロナウイルスの流行により、その後の見通しがもてないまま休校となった。本校では授業の代替として、家庭学習用のプリントを印刷し、各家庭へ配布し、家庭の協力を得ながら自主学習を進めてもらうことにした。ラインズeライブラリアドバンスという、市で導入しているオンライン学習支援サービスや、NHK for schoolの動画コンテンツを紹介し活用を促すことも同時並行で行った。インターネット環境が全家庭に整っていないという状況もあり、オンライン教材での学習はあくまでも補的な扱いとし、メインは紙ベースでの学習を進めていた。

全家庭への電話連絡の際に状況を聞いていくと、保護者同士でつながりがある児童同士はLINEで話やビデオ通話をするなどしてつながりを保っている児童もいたが、孤立している状態の児童もいた。保護者の方から「他の家庭はどうなっていますか」「クラスの同級生のお子さんたちは元気ですか」などの声も多く聞かれた。児童と教師のつながり、児童同士のつながりを何とかして作らなければならない状況であった。

本校にはICTのプロフェッショナルと呼べるまでの専門性がある職員は1人もいない。それなのに、なぜ、君津市で先立ってZOOMを導入した数々

の実践を進めることができたのか。それは、「やればできる」という前のめりな姿勢、「失敗ありきでとにかくやってみよう」というチャレンジ精神、そして何よりも「つながりを作らなければならない」という使命感が強くあったからだと自負している。

2 ZOOMを導入するまでの経緯

2-1 きっかけ

ZOOM導入のきっかけは4月中旬、本校職員が「他県の学校では朝の会をZOOMでやっているみたいですよ」と、新聞記事を職員室に持ち込んだことだった。オンライン学習の話題はちらほら出ていたものの、「全員が参加できない状態でオンライン授業では、不公平になってしまうのではないかと」懐疑的な意見が多くあった。しかし、手をこまねているばかりでは、何もしない大人の姿を子どもたちに見せてしまうことになる。「何かアクションを起こさねばならない」と、自分たちに何ができるか模索していたところに、朝の会をZOOMで行う実践を目にし、その活用について検討することになった。

2-2 職員間での検討

5月の段階で、全家庭に端末があるわけではない環境から考えると、学習進度に関わってしまう授業を行うのは公平性に欠けると本校では判断し、オンラインで授業を進めることについては実施しないことにした。

互いの顔が見られない状態が続く中、職員の会話の中で「少しでも子どもたちの精神的な不安を取り除きたい」「子どもたちは先生の顔が見られるだけでも安心するのでは」などの意見が出てきた。

職員の話し合いの意見をまとめると、次のとおりであった。

- ・学習進度には関わりのないものを行う
- ・先生たちの顔を見て安心してもらう
- ・友達の顔を見て安心してもらう
- ・自宅で乱れがちな生活のリズムを作る
- ・運動不足を解消する
- ・今後のためにオンライン会議ツールに慣れてもらう

まずは「子どもたちと先生たち、また子どもたち同士のつながりを取り戻す」ということを重視して、児童たちがすでにできる朝のラジオ体操を行うという小さな一歩を踏み出すことにした。自宅待機での運動不足の解消と生活のリズム作りにもちょうどよいと考えた。

2-3 職員で ZOOM の試行

(4月下旬～5月初旬)

職員の中でZOOMを使った経験があったのは、わずか3人であった。その3人も他人が開いたミーティングに参加したという経験しかなく、詳しいことが分からなかった。まずはZOOMというアプリがどのようなものかを知らなくてはならない。約1週間をかけ、ZOOMとは何か、安全性に問題はないか、というところから職員のチームワークで調べ共通理解を図った。そして「まずは、職員間で試してみないとよく分からないのでは」という意見が出た。

「やればできる」の本校のスローガンのもと、ここからがスピーディに進んだ。最初に、各個人の携帯電話やタブレットPCの端末にZOOMをダウンロードした。この時点では、ZOOMというアプリそのものに不安感がある職員もいたため、無理なく参加できる職員から始めて2人、3人と少しずつ増えていった。試しているうちに、次第に

ZOOMへの抵抗感がなくなっていき、操作方法を覚え、ほぼ全員が個々の端末からZOOMミーティングに参加できるようになった。

3 休校期間～分散登校中の実践

3-1 『ZOOM でラジオ体操 (休校期間中)』

(5月13日～5月22日)

ゴールデンウィーク明けの5月8日からは、職員でZOOMを使ったラジオ体操の練習も重ねた。ちょうどこの時期は職員がA・Bチームに分かれて分散出勤中で、しばらく会えていない職員同士が顔を合わせる貴重な時間にもなった。学校に出勤しているチームは職員室や体育館などから、自宅勤務中の職員は各自宅や近所の公園からZOOMにつなぎ、タイムラグがどのくらいあるのか、どの画面でどのように体操を見せたら参加する児童が合わせやすいのか、どのタイミングで音声をミュートにするのか、など先生役と児童役に分かれて検証を重ねた。また、職員がZOOMを使って試行錯誤する様子を学校HPでも発信し、保護者に「これからZOOMを活用するかもしれない」ことを知らせた。

何度か職員だけのラジオ体操を試し、スムーズな進行ができるようになったので、八重原小学校の『ZOOMでラジオ体操』の取り組みを始める準備が整った。保護者への案内文書を全校一斉メールと学校HPで公開し、参加を呼びかけた。ZOOM無料版は参加人数の上限が100人までなので、全校児童250人程の本校の規模から考え、初日は4～6年の高学年の部、2日目は1～3年の低学年の部に分けて2日間試行することにした。うまくいかなくてもアクションを起こした職員の姿を子どもたちは感じてくれるはずだと信じた。どのくらいの子どもたちが参加してくれるのか不安も大きかったが、まずは「一歩踏み出す」ということが大事ではないかと考えた。

5月13日、いよいよ本番。結果は、初日から40人程度が参加してくれた。2日間の試行の後、全校一斉に実施しても参加人数が上限の100家庭は上回らないだろうと予測できたので、3日目か

らは全校一斉実施とした。この後も常に50人程度の参加があり、最大参加数は70人程度であった。

ラジオ体操実施の前後に5分～10分程度のゆとりの時間を設け、そこで子どもたちと教師、友達同士が顔を合わせ、名前を呼び合ったり挨拶を交わしたりできるようにした。長い休校でずっと会えなかった友達や先生に久しぶりに画面越しに会い、「先生や友達に会えて安心した」という児童の感想があった。また、このゆとり時間に、少しずつZOOMのミュートの仕方やチャット機能の使い方などを説明し、自然に児童たちも使えるようになっていった。

また、昨年度まで本校に在籍していた、アメリカの学校に転校した児童も5月19日から数回ZOOMで参加してくれた。保護者同士のつながりで本校の「ZOOMでラジオ体操」の噂を聞きつけ、参加してくれたという。アメリカに住む友達と久しぶりに会えた本校の児童たちには笑顔があふれ、互いにコミュニケーションをとる姿が見られた。アメリカ時間は午後8時で夜だったことにも驚く声が上がった。外国とも簡単につながれたことは、我々職員にとって大きな気づきとなり、その後の様々な取り組みにつながった。



3-2 『ZOOMでラジオ体操（分散登校期間中）』（5月26日～6月12日）

慣らし登校が5月26日から、続いて分散登校が6月1日から始まったが、この間A・Bの2チームに分けざるを得なかったため、A・Bチームは互いに会えないまましばらく過ごすことを強いられた。この場面でも、ZOOMが有効活用された。Aチームが登校したら、朝のラジオ体操を教室で

行い、その様子を自宅待機組のBチームの児童とZOOMでつないだのである。これにより、今まで自宅ではZOOMが使えない状況にあった児童も、教室でZOOMを体験でき、そのよさを実感することができたようであった。

もちろん、家庭の事情により全員参加できたわけではないが、ラジオ体操の前後で児童同士が挨拶を交わすなど、横のつながりを少しでも保つことができたツールの一つとなったことは間違いない。



3-3 『ONE WORLD 体操』ビデオ制作

『ONE WORLD（ワンワールド）』とは、2019年度の6年生が総合的な学習の一環として、アフリカマラウイ共和国の児童たちやミュージシャンとつながり、共同制作を行った楽曲である。2019年度には運動会表現のBGMや朝の全校BGMなどで活用された。合唱曲にもアレンジされ、学校HPでも音源と楽譜を公開している。

全校児童へのアンケートなどから当時の6年生の思いを受け、彼らが卒業後も学校に残すことになっていた。しかしながら、4月からの休校ですぐには新たな活用が進まない中、まずは職員が先陣を切ってアクションを起こすことにした。

簡易音楽編集のアプリを使える職員が、何かに使えるのではと自主的に『ONE WORLD』を体操ができるような音源に編集してくれていた。それを受け、自宅でも手軽に行える体操を他の複数の職員で考案し、八重原小オリジナル『ONE WORLD 体操』が完成した。

『ZOOMでラジオ体操』ができるのなら、今度は『ZOOMでONE WORLD 体操』もできるの

ではないか、と可能性を感じていた。

しかしラジオ体操と違い、休校中に職員で作る『ONE WORLD 体操』のやり方を児童は知らない。それならば、そのお手本動画を職員で作って学校HPにアップすれば、家庭で事前に練習し、朝の体操でみんなでそろってできるようになるのではないか。そう考えて、『ONE WORLD 体操』のお手本動画を全職員がみんなで少しずつ登場し、作成することにした。ちょうどタイミングよく分散出勤が解除されたことも追い風となり、完成に至った。全職員が体操に参加して作成したことで、チーム力が伝わる動画となった。

その後、児童の一斉登校も始まったため、自宅と学校を結ぶ『ZOOMでONE WORLD 体操』は実施されることはなかった。しかし、各教室では運動不足解消のためにビデオをみんなで見ながら体操に取り組んだり、後に紹介する1年生を迎える会でもZOOMで各教室をつなぎ、全校『ONE WORLD 体操』を実施したりすることでビデオを活用することができた。

10月末に行われる予定の体育発表会（運動会の代替行事）では、テーマ「団結」のもと、全校児童が一つになる『ONE WORLD 体操』を披露する予定である。

※『ONE WORLD 体操』：君津市立八重原小学校HP「八重原クリエイト」タグ内

<https://www.fureai-cloud.jp/kmt-yaehara-e>



4 | ZOOMを活用したリモート実践

4-1 校内の環境整備

『ZOOMでラジオ体操』の成功をきっかけに、コロナ禍の制限がある中でもZOOMを活用すればいろいろできるのではないかと、職員にポジティブな雰囲気が広がった。そこで挙げたのが、1年生を迎える会のZOOMでの実施である。全校が一堂に会することができない中、各教室をZOOMでつなげば一体感が味わえる行事になるのではと考え、校内のICT環境を整備することにした。

まずは、インターネット環境である。有線LANが事情により使えない状況にあったので、市から支給されているWiFiルーターをうまく配置すれば全教室にインターネットがつながることを発見し、クリアした。

次に、どのように教室で画面を映すかである。学校のプロジェクター・スクリーンとテレビを総動員して各教室に配備した。不足分は学校予算から新規に買い足した。HDMIケーブルなどの動作チェックも念入りに行ったが、たびたび不具合も生じた。それでも、使っていくうちに機器同士の相性や突発的な不具合への対処法などの経験値を蓄積することができた。

4-2 1年生を迎える会（7月10日）

環境が整備されたので、次は職員が各教室で機器を扱えるようにしなくてはならない。放課後に少数職員でのリハーサル2回、全職員でのリハーサル2回、合計4回行った。リハーサルのたびに新たな課題が見つかり、それらをしらみつぶしに解決していくようにした。

プログラムの中に、「各学級から1年生へのメッセージリレー」があった。これは、クラスごとに1年生へのメッセージと出し物（クイズなど）を考え、バトンでリレーしていくという企画である。画面切り替えの方法など、慣れないと難しい部分もあったが、チームワークで乗り越えた。

最後に、画面越しに全校で『ONE WORLD 体

操』を踊った。『ONE WORLD 体操』の合言葉である「はなれていても心は一つ」が具現化できた瞬間であった。



4-3 1学期終業式（8月7日）

1年生を迎える会に引き続き、自然な流れで終業式もZOOMで実施した。各学年代表児童からの1学期の振り返り発表や、マスクをしたままではあるが全校の校歌斉唱も行った。

4-4 6年総合「つながろう世界と」

本校の特色として、SDGsの学びを全校で取り入れている。その一環で6年生の総合では「つながろう世界と」という単元を設定している。昨年度は合計5名の外部講師を実際に学校に招いて話を聞くことができた。今年度は移動制限があるなど、コロナウイルス感染予防対策が日々変化する中で、これまでのように実施できない時期があった。担任の間では「この単元自体がカットになるかもしれない」と悲観的に考えていた時期もあった。しかし、ZOOMの活用をしていく中で、世界とつながる様々な方の話を聞くのにZOOMは親和性が高いのではと気づき、リモートで実践してみることにした。直接会って打ち合わせができないため、打ち合わせの段階からZOOMを活用した。実施までの基本的な流れは、以下のとおりである。

- 1 コーディネーター教員から外部講師へコンセプト伝達（メール及びZOOM）
- 2 担任+コーディネーター教員+外部講師の打ち合わせ（ZOOM）
- 3 パワーポイント資料の確認・修正（ZOOMもしくはメール）
- 4 パワーポイント資料の最終確認
- 5 ZOOM 授業本番

通常、外部講師との打ち合わせは担当の教員1人が電話で済ませるか、実際にどこかで集まり話し合う必要があるが、どちらにしても課題がある。

まず、電話で済ませる場合は、電話をしていない教員との情報伝達がうまくいかない場合があり、「もっとこんな話を聞きたかったのに」という

ことが起こり得る。

次に、集まって話し合いの場を設ける場合は、上記のような情報伝達のミスは起こりづらいが、日程調整が難しい。

いつでもどこでもつながれるZOOMを使った打ち合わせでは、一気に上の2つの課題（情報伝達ミス、日程調整の難しさ）を解決できる。実際に、担任、コーディネーター役の教員、外部講師の3者がそれぞれ別の場所から打ち合わせしたり、担任が校外学習の下見に出かけている日の休憩の時間を使って打ち合わせしたりすることもあった。

このような事前準備を経て、下の表のとおり4か国に関わる方々に外部講師として依頼し、話を聞くことができた。

国(時期)	講師者	参加者の所在地	備考
7月30日 サウジアラビア (～6時頃)	・サウジアラビア ジッダ日本人学 校5・6年児童4 名	・千葉県君津市 ・ジッダ日本人学校 ・ジッダ自宅 ・東京都(一時帰国中の ジッダ日本人学校児童) ・仙台市(遠征時帰中の ジッダ日本人学校教員)	日本人学校の児童が サウジアラビアの生 活や文化についてプ レゼンを実施。
8月5日 マラウイ (～7時頃)	・立野真紀氏(元 マラウイ青年海 外協力隊)	・富山県(立野氏) ・千葉県君津市 ・ジッダ日本人学校 ・ジッダ自宅 ・東京都・仙台市	ジッダ日本人学校の 児童たちも八重原小 学校児童と合同で参 加。以下エジプト、サ モアの語も同様。
9月8日 エジプト (～7時頃)	・加藤英太氏(元 エジプト青年海 外協力隊) ・ハディール氏 (加藤氏友人エ ジプト人)	・福岡県成川町(加藤氏) ・エジプト ・千葉県君津市 ・ジッダ日本人学校 ・ジッダ自宅 ・東京都・仙台市	加藤氏は福岡県から の参加だったが、エジ プト在住エジプト人 を途中でZOOMに招 き、現地レポートをし てもらった。
9月10日 サモア (～5時頃)	・成瀬美紀氏(在 サモア日本国大 使館) ・ライナム氏(成 瀬氏友人サモア 人)	・サモア(成瀬氏) ・千葉県君津市 ・ジッダ日本人学校 ・ジッダ自宅 ・東京都・仙台市	成瀬氏はサモアから サモア人の友人と一 緒に参加、時差で外が 暗い様子が見える場 所を選んで参加。

サウジアラビアについては、当初ジッダ日本人学校の先生にプレゼンをしてもらうつもりで依頼したが、「学習の一環として、児童にプレゼン資料をまとめさせ発表させたい」との前向きな返事をいただき、思いがけずサウジアラビアと君津での児童同士の交流が始まった。

このつながりを1回で終わらせてしまうのはもったいない。その後に八重原小で予定していたマラウイ、エジプト、サモアの話もZOOMなら

合同で参加できるのではないかと考え、参加してもらうことになった。

違う学校、違う場所にいながら同じ話を聞き、一緒に考えを深めることができるという実践につながった。実際に質疑応答の場面では、「相手の学校の子はこんなこと質問していてすごい」など、同じクラスだけで話を聞いていたら気づかなかったことに気づけ、刺激を受け合えたことも、ZOOM合同学習の効果である。

初めのうちは、とにかくZOOMを無事につなげることで満足していたが、児童の反応などから、改善点なども見えてきた。感想の中に「現地の生の声が聞きたい」という意見があり、「現地と何とかつなげることはできないか」と3回目の加藤氏にお願いしたところ、「現地のエジプト人とつなげることができる」との回答があった。時差の問題もクリアできる時間帯に授業を設定した。エジプト在住の日本語が話せるハディール氏が自宅からZOOMに参加してくれて、児童も興味深く聞き入っていた。



一方、エジプトだけでなく、サウジアラビアの回もそうであったが、あまりにも自然に海外とつながったことと撮影場所が室内であったことから、八重原小の児童たちの中には「本当に外国？」と思ってしまう子どももいた。

そこで、サモアの回では「少しでもよいので外の様子を映してほしい」と依頼した。すると、ZOOM 撮影場所を野外の南国情緒あふれるレストランに設定してくれ、夕暮れの中にヤシの木が見える様子から、「遠い世界とつながっている」という実感をもつことができた。授業後の感想の中には、講話の内容から学んだことはもちろんだが、「ZOOMを使えば世界中どこでもつながれることが分かった」と、ZOOMそのものの有効性について記述する児童も多くいた。



また、これだけの回数を重ねると、どうしても欠席の児童がいる回がでてきてしまう。外部講師の話をととても楽しみにしている児童は多く、欠席することになってしまったときの児童の落胆は相当である。そのような場合には、ZOOMのレコーディング機能を使い録画してあった動画を、登校した日の休み時間などを利用して視聴することで、最低限のフォローアップができた。

4-5 車いすシンガー ZOOM で福祉授業 (9月16日)

本校の5年生の総合学習では、福祉に関することを学ぶ単元がある。例年、車いす体験を行っていたが、器具の貸し出しなどに制限がかかり、学習方法の変更を強いられた。そこで、車いすシンガーとして活動する小澤綾子氏に外部講師を依頼することにした。しかし、東京都在住の

小澤氏を実際に学校に招くには、移動制限や日程調整など様々な障壁が存在した。そこで、ZOOMの力を借りて、リモートで授業をお願いすることにした。

小澤氏にとっても、「車いすでの移動のこと、多忙な中での日程調整などを考えたら、ZOOMで授業を行うのは自分にとってプラス面も多い」とのことであった。

「つながろう世界と」と同様に、ZOOMでの打ち合わせ、パワーポイント資料確認・修正を経て本番に至った。「つながろう世界と」で経験が積まれていたので、この段取りはスムーズに行うことができた。

新たな挑戦として、ZOOM授業の中にグループワークを取り入れた。グループで話し合い、ミニホワイトボードに意見をまとめさせた。その後の発表の場面ではグループの代表がそれぞれZOOMカメラに向かって、ホワイトボードを見せながら小澤氏に自分たちの意見を発信した。受け身になりがちなZOOM授業だが、このような主体的な学習活動を取り入れると児童の参加感が増し、その後も集中して授業に参加できた。質問場面では、多くの質問が出た。話す側の小澤氏も「一方的に話しているだけより、反応や意見を聞きながらのほうがモチベーションが上がる」とのことであった。



最後は児童からのお礼として、小澤氏のオリジナル曲『嬉し涙が止まらない』を合唱した。児童の歌う姿に感動した小澤氏も一緒に歌ってくれて、感動で教室が包まれた。多少のタイムラグは気にならなかった。

また、小澤氏の了承を得て、保護者のZOOMでの参観も学年日より呼びかけていた。共働き家庭が多く、急なお知らせということもあり、残念ながら当日保護者の参加者はいなかったが、今後このようにリモートで授業見学することについての可能性を示せたのではないかと思う。



4-6 異学年間の ZOOM リポーター学習交流 (10月6日)

ふるさとに誇りを持つこと、また世界とのつながりを知ることをねらい、重要無形民俗文化財である上総掘りの体験を、SDGsの学びの一つとして今年度からカリキュラムに組み込むことにした。上総掘りは、千葉県の上総地方で考案され、上総地方の職人によって日本の各地に広められた、掘りぬき井戸の掘削技術である。君津地方では農業用水や飲料水の井戸として使われているが、世界に目を向けると、さらに改良された技術で、水不足地域でも井戸掘削事業に活躍している。

(君津市HP参照)

この上総掘りを体験できる施設が、ちょうど5年生が校外学習で毎年訪れている千葉県立君津亀山少年自然の家にあることが分かり、この校外学習の機会を活用することにした。

本校では、水に関わる学習、そして千葉県の学習として上総掘りを4年生で学ぶ。4年生で知識として学んだことを、5年生では体験することとして位置づけ、カリキュラムに組み込んだ。2学年にわたっての学習ならば、5年生が4年生に、上総掘りを体験する様子をZOOMで生中継リポートするのはどうかと考えた。5年生にとっては、ニュースリポーター体験をすることで、他者に経験を生で伝える学習となる。さらに4年生にとっては本の中の知識だった上総掘りが、上級生が体験している様子を見ることでより身近に感じ、上総掘りへの興味関心を高めることができるのではないかと考えた。

5年生の児童にこのアイデアを紹介すると、「おもしろそう!」「やってみたい!」と何人もの児童が立候補した。その中から抽選で2人が選ばれ、撮影は担任が行うこととなった。2人のZOOMリポーターは上総掘りを動かす手応えや、体験した感想などを表情豊かに伝え、4年生2クラスはその様子をそれぞれの教室でZOOMにつないで視聴した。生中継リポート後、4年生の児童たちは「自分たちもやりたい!」「来年が楽しみ!」と意欲が高まった様子がうかがえた。



4-7 ZOOM でクリスマスコンサート (12月23日)

本校では、例年11月頃に体育館で校内音楽コ

ンサートを行っていたが、全校が集まることのできない中、なんとか全校でそれぞれの学年の音楽を互いに聴き合う場を設けたいと考え、この行事を企画した。コンサートの進行や感想発表などはもちろん生中継するが、音楽をZOOMで生中継すると、音質が悪くなったり、音飛びしてしまったりすることがある。そこで今回は合奏・合唱の発表部分については、それぞれの学年で録画したものを流すことにした。コンサートの終盤の全校合奏『ONE WORLD』のプログラムでは、音楽主任が合奏用に編曲した楽譜を使用した。また、各学年の演奏を録音・録画し編集で音源・映像をつなげて全校で一つのものに作り上げ、音楽で一体感が感じられる場面としたいと考えた。

4-8 職員研修での活用

11月中旬には本校全職員が参加する職員研修として、ZOOMで外部講師（元マラウイ青年海外協力隊員の冬野由季氏）から「世界と日本の福祉」についての話を聞く機会を設ける予定である。これによって全職員が参加者（学習者）側としてZOOMによるリモート授業の受ける経験を共有することができる。これまでにリモート授業の見学をしたことがあっても、実際に授業を受ける側になって気づくこともあるだろう。

リモート授業のよさと課題を全職員で洗い出す機会とし、今後の実際のリモート授業に生かすことをねらいたい。

5 | ZOOM活用の成果と課題

【成果】

- ・児童がZOOMを通して、離れていてもつながれることを実感することができた。
- ・児童の学習の幅が広がった。
- ・異学年間の新たな学習交流が生まれた。
- ・他の学校の児童との合同授業ができた。
- ・レコーディング機能を使えば、欠席時のフォローアップが簡単にできた。
- ・打ち合わせもいつでもどこでも行うことができ、

情報伝達ミスや日程調整の難しさが減った。

- ・外部講師にとって移動の時間が省けた。
- ・外部講師を受け入れる学校側の負担感が減った。
- ・外部講師の授業を保護者も参観できる。
- ・新たなチャレンジをしたことにより、職員全体にポジティブな雰囲気が生まれた。
- ・保護者もZOOMの活用については好意的に受け止めてくれ、PTAの会議でも「今年ならでは、八重原小ならではのことにチャレンジしたい」と、ポジティブな雰囲気が伝播した。

【課題】

- ・リモート授業は、実際の生の授業には及ばないことを前提として考える必要がある。
- ・グループワークなどを取り入れ、主体的な学びの場になるように工夫しないと一方的な受け身の授業になってしまう。
- ・機器の不具合などが起きることを前提として準備する必要がある。

6 | あとがき

コロナ禍のピンチの中で、我々職員の根底にあったのは学校教育目標でもある「夢・チャレンジ・やればできる」という合言葉だ。4月当初、コロナ禍で先が見えず真っ暗な気持ちで過ごしたときには、このレポートにまとめたようなことが実践できるとは夢にも思っていなかった。立ち止まったことで、子どもたちのために何ができるのか、何をすべきなのかを徹底的に考え議論した。そこで全職員一丸となって「失敗を恐れずにとりあえずやってみよう」というチャレンジ精神で踏み出した小さな一歩が、振り返ってみると本レポートにまとめたような様々な活動に広がり、八重原小学校としての大きな歩みとなった。チームワークの力でピンチが大きなチャンスになるんだと、我々自身が学ぶことができた。